

軍の集結地點等を綜合判定し、奇襲上陸作戰を計畫したものと信ぜられる。併し、ドイツの空軍の爆撃の効果は著しく、地上の軍事施設に對しても一大脅威であらうが、上陸掩護には空軍の活動は絶大であるとしても、運送船の護衛においては、絶対に安心出来るものでないのである。如何に牒報機關を動員しても、あのせまい海峡を越へて奇襲的上陸は絶対に出来ぬのである。近代戦殊に、歐洲の現状としては、奇襲的英本土に上陸することは、あり得ないものである。

かくして残るのは、強行通過の一途のみである。空軍の大編隊を以て、英本土の猛爆を決定し、その英國空軍の基地を破壊し、補給を断ち、飛行場を覆滅し、大運送船團を快速艦艇により護送せしめ、そしてそれを英國空軍の襲撃にさらすことなく、進攻するのである。その際、空軍、海軍の爆撃砲撃を上陸地點に集中して、一舉に押し渡るのである。その犠牲の多い事は止むを得ぬことであり、英國艦隊主力の攻撃は、英國興亡の運命をかけるもの故、壯絶言語に絶するものであらう。この際の問題は、ドイツ海軍が、英國の全艦隊を阻止しうるや否やである。如何に英國主力艦隊の活動を封ずる水路を選び、潜水艦 空軍によつて快

速艇隊の活躍と呼應しても、その成功は疑問とせねばなるまい。又、英本國上陸後も、ドイツが制海權を把握せざる以上、その部隊の作戰を續けることは不可能であらう。

要するに、英國の空軍が減耗し、海軍が制壓せられざる以上、對英上陸は困難とせねばならないのである。

英國が大陸作戰に失敗した以上、あとは空軍と海軍とに依る長期的攻防戰である。従つてそこに、英國の國民性、經濟、外交、軍事等、國防國家としての諸要素が、總て、提出せられ、歴史の審判を受けるのである。眞に國家の總力戰となるのである。

九 英人の特性と植民政策

英人は由來、牛の如く精力的である。決して線は細くない。天才的の國民ではない。實際的で常識的で、忍耐力強く鈍重である。頗る平凡であるが堅實であり、友人としてもよく、紳士を理想としてゐる。進取的の半面もあるが、決して飛躍的でない。しかしよく、狀況の判断を誤ることなく、機を見るに敏である。個人としては誠に良い紳士を多く見るが、國家

として悪辣なことは世界に類を見ないであらう。英人が物質的であつて、あくまで實利を望み世界外交に又植民政策に雄飛してゐることは、明かなる事實である。

英人は出足の鈍い國民である。この前の歐洲大戰においては、その特性を良く表はしてしまつた。大陸においてドイツ側に壓倒されつゝも、世界の列強を巧みに引き入れ、米國參戦まで漕ぎつけ、遂に最後の勝利を得てしまつた。誠に英人らしい行動である。

英國の貴族的教育は最早、世界更新の線に沿ふものでなく、既に過去のものであるが、あくまで個人に立脚し、個人を練磨してゆくことにより、争へない底力を與へてゐる。第一次世界大戰において、英國の陸軍が敗北し、悲惨なる状況に墜ちても、英國の兵には、最後の戦闘力が残存してゐたと述べてゐる人もある。指揮者たふれ、戦友たふれて、一兵士となつても、尙抵抗をつゞけた例が知られてゐる。この最後まで戦ふ力こそは、決して油断ならぬものと思はれる。

我々は、英國を經濟軍備および、最近までの作戦の見地より批判したが、英國の植民政策の方面から、これを検討することも必要である。

資本主義は、その大量的工場生産品を維持する一の方法として、商業資本を持つことが第一要件であるが、その商業資本蓄積の地盤として、封建的領域國家を持つてゐたのである。しかしこれは狭小に過ぎ、これだけでは發展の餘地がないのである。それで海外貿易、植民地開拓となつて發展してきたのである。近世においてその植民運動は、ポルトガル、スペインによつて始められたが、これに對して、あとから迫つてきたものは、オランダ、フランスであつた。オランダは東洋においてポルトガルと戦ひ、フランスはアメリカ植民に於てスペインと戦つた。そしてこのあと、英國が登場してきたのであつた。オランダ、イギリスは共に、東洋植民地に供給すべき商品の大量生産を成し遂げた國である。英國は殊に近世工業開拓功勞者であり、又先驅者でもあり、列國に先んじて、大量生産の能率を上げて行つた。そしてその商品の輸出に於てはあらゆる方法を採用した。その東洋諸國に、内部的抗争を起さしめて、その隙に乗じて開拓するのを常奪手段としてゐた。インドに足場を作つたフランスにせよ、また印度に政權を確立した英國にせよ、インド内の分裂と政權の對立抗争とを、その第一の政策としてゐた。

印度ももともと一の獨立國家をなしてゐた。モゴール王國は、一つの國家の形を保つてゐたのであつた。しかし十八世紀の頃は、既に國勢衰へ、その藩王の横暴が日に増して來、中央の威令全く行はれず、英國の乗ずる所となつたのであつた。そして互に攻争せしめつゝ次第にその保護國を育成し、東印度會社はその辣腕を振ひ、英國の帝國主義的植民政策を文字通りに實行したのであつた。かくて英國の巨腕に壓服せられ、完全なる植民地となつてしまつたのである。

一〇 英の寶庫インドと民心離反

現在英領印度は一千二百萬平方哩に及ぶ老成なる領域であり、三億二千の人口を有してゐる。この地に營々心血を注ぎ、完全に國民を屈服せしめ、産業を起し、都市を計畫し、鐵道を敷設し、その統治に絶大の努力を拂つたのである。そして現在は英國の大富源の領域となつて居り、軍備を充實し、永久に保全の方途を講じてゐる。この植民地は英國の重大なる市場であり、又英國への原料供給地である。この領域なくしては、英國の經濟はその成立が危

くなるのである。

英國は支那を植民地化するため、非常なる經營を始めたのであつたが、その時期が遅れたのは、印度經營のためとも云はれてゐる。とにかく、印度が如何に英國に取つて重大なる要素であるか、了解出來るであらう。

この印度の安定を計るため、英國が如何に外交的に苦心したかは疑ひなく、その光榮ある孤立をすてゝ、東洋の日本と結んだのも、ロシアの南下を恐れたためであり、また最近、シंगाポール軍港の防備強化に力め、航空基地としてまた大戰艦の根據地として築設してゐるのも、印度保全のためと見ることが出来る。

印度が種々の種族の雜居せることと、その社會に多くの階級があつて、統一に困難なことは、英國に取つて一の好條件である。その言語においても、四大方言が行はれて居り、風俗習慣の差違甚だしく、一朝一夕にしてこれを合化し得る見込はないのである。

印度は一九三七年から新憲法が實施せられ、自治州から成る聯邦制を取り、聯邦議會と州議會には印度人を參加せしめ、印度人自治の形式を取つてゐるが、總督と州知事は、軍事外

交につき特殊の権限を有し、印度人の生活には至つて自由は乏しいのである。その總督や州知事は、英國の政策を代表するものであり印度民衆の福利増進の觀念が全然ないのである。且つ印度の民衆はその大部分が目に一丁字すらないのである。義務教育制もなく、文明の衛生設備も備はらず、民衆は悪疫の流行と、完全なる専政に苦しむのである。その政府の官吏は大英帝國の利益のため、そして印度を英國の永久の寶庫たらしむべく、努力してゐるのである。

かゝる分散的の一大國家を更新せしめ、その民族を結合して、印度を解放すべく、國民會議派、テロリスト、全印回教徒聯盟等がある。國民會議派は、印度の中堅層を多く含み、その巨頭マハトマ、ガンヂーは以前より眞理の把持を叫び、無抵抗主義の獨立運動をつゞけて來たが、今や昔日の指導力なく、國民會議派も次第に急進的色彩を帯びて來てゐる。そしてその急進派は、既に印度政府に對し、印度獨立の宣言と中央立法部の容認する臨時國民政府の設置を要求してゐるのである。

またテロリストなるものは、地下に潜行して獨立運動を計畫してゐるものである。これは

秘密結社であり、その行動は極端なものであり、治安を覆滅し、英國の主權を排撃せんとするものである。

一體英國の統治は全く冷酷なるものであつた。第一次歐洲大戰には、戦後の自治を與へる條件で、百二十萬におよぶ大部隊と、三億ポンドの軍費と食糧等を歐洲戦線に送つたのであつたが、英國はこれを實行するに至らなかつた。これが印度の民心の離反を引き起したことに甚しく、獨立運動は漸く激化せんとしてゐるのである。

この情勢により、英國では、印度の部隊を戰場へ送ることも出來ないのである。印度の部隊は、特別の編成のものであり、その機械化が勵行せられず、到底これを歐洲へ送り、他の部隊との連合作戦には合し得ない。また印度には若干の空軍があり、これらはすべてが英帝國の支配下に在りて、印度保全の任務に服してゐるのである。

更に印度國內には、共産黨の策動があつて、印度の將來の不安を思はせる。いづれにせよ印度は昔のそれと全く異つて來てゐる。現在としては、その獨立運動者間に團結力乏しく、直に成果をあげるとは期待し得ないであらうが、印度の解放運動も最早、既定の事實であ

り、時間の問題であらう。この印度の英國より離れる時には、心理的ならびに經濟的影響は甚大であり、英國植民地の解放の時であり、大英帝國の經濟の互解する時であらう。

一一 第二の植民地争奪戦

一たい第一次世界大戦の終局は、植民地問題の處理としての形を取つた。ドイツは海外の植民地を全部のみならず、その本國の周邊の要地まで失つてゐる。且つ、その本國をば小國家群によつて包圍し、ドイツの歐洲大陸において、更生することを否定することを露骨に表はしたのであつた。又植民地をば國際聯盟の委任統治の形式を以て管理した。

併しその後ドイツを始め、民族運動が強化されて來、ドイツの復興せんとする、國際關係に對する打破の挑戦と、英米佛の國際關係維持の努力とが對立して來たのは止むを得ないことであつた。又一方、ソ聯に於ける世界の共產主義的統一の企圖が、この對立と共に、世界の動きに、大なる波紋を投げてきた。

ドイツは再軍備の方法により、第一の復興の工作の足場を得た。そしてオーストリアと合

併し、ズデーテン地方をその支配下に收め、着々としてその工作を進めた。これらは皆ドイツ國民の發展の一の例證ではあるが、又同時に、ドイツ經濟の更生擴大する分野を求めたことであり、生活領域の強化を目的としたのである。その政治經濟の發展に従つて、支配領域の擴張を意味してゐる。現在の歐洲大戦は、これの表現とも考へることが出来るのである。かくて英佛は現在の狀況を保持せんとしてゐるが、ドイツはこれを破壊して、たゞ再生の一途をたどらうとしてゐるのだ。ベルサイユ條約を破棄し、大陸軍と空軍と更に海軍を建設し、そして失地の恢復に乗りだしてゐるのだ。舊ドイツ本國領のみならず、舊ドイツ植民地の問題が解決されなくてはならぬ時期に達してゐるのである。

ドイツの、その接壤地帯合併の行爲は英佛に取つて一つの大きな威嚇であつた。ドイツ民族の前進の聲である。舊ドイツのアフリカ植民地の回復ではないにせよ、オーストリア、ズデーテン、チェッコの問題を始め、ポーランドの問題は、一の失地恢復の行動といひ得る。一の植民地設定の行動と言ひ得るのである。そしてまたバルカンへの工作も強化せられてゐる。これこそ、英佛として絶対に黙過することを許さざる事態である。またドイツのソ聯と

の工作は順調に進行してゐるものと言ふことが出来る。そしてソ聯方面への安全感は更に一層、バルカン工作へドイツを驅り立てるのである。第一次歐洲大戰前、ウイルヘルム二世はベルリンよりビザンチウム、バクダートへと道路を描き、所謂三B政策を計畫して、世界へ一の大問題を投げたが、今やドイツが、バルカン工作を開始してゐるのを見て、思ひ當ることがあるのである。

かくて今次の大戦も一の植民地戦争と見ることも出来る。ポーランドをドイツが攻略したのが、その第一の導火點であり、英國が、それに應じて、ドイツの再建と進出を防禦しようとして立ち上がったまでである。そしてソ聯と米國も亦この動きにのつて、更にその強大を計畫してゐることにより、この戦は、次第にその内延を大ならしめてゐる。

英國は、インドを始め世界全般に老大なる植民地を擁してゐる。その領域としての、從屬状態を永久に保つことにより、世界制覇の永久ならんことを欲してゐる。ドイツは新興の勢をかり、その生存權を主張せんとして植民地の恢復と設定に新展開を始めてゐるのである。嘗つて英國の文豪カーライルが、かのシェイクスピアを評して、英國の最大の寶となし、

「印度はあるもなきも可なり、シェイクスピアは吾人になかるべからず」と叫んだことがあるが、當時は勿論、印度の獨立運動などを不安に思つたことはなく、たゞ人の注意をひくため、印度を引き合に出したことはないかと思はれる。併し、英國は印度なくては生存出来ぬのである。印度の存立は、英帝國の存在に關係して来る。英國が心血を注いで經營したのも全く當然なのである。

一二 獨英衝突の必然性

今後、印度問題は英國としての重大問題となつて来ることは明である。印度を始め、東洋に、英國と利害の相容れぬ條件が、刻々増大して来る。支那事變も一の英國の東洋よりの後退を要求してゐることである。そして印度のみならず、英國は植民地の經營に如何に努力するにせよ、その植民地の状態は、昔日の如く平穩として看過出来るものではないのである。ドイツの植民政策は、その堅實なることにおいて、世界の驚異的である。ドイツの植民政策と英國のそれとは、その勢力の伸展上衝突は止むを得ないことである。

英國の植民地は、その經營の久しきことにより、英國の市場として、その役目を果してゐることは完全なものであらう。併しながら、列國の工業的進展と海外貿易の發達とにより、その完全なる植民地性が、次第に薄くなつてゆくことは争へぬ事實である。且つまた、英人全般が植民地により、莫大なる利益を得てゐる半面、それにより非常なる國力の低下も來してゐるのである。それは植民地經營のため英國の全社會の徳義心がゆるんだことであり、國民全般が贅澤になつたことである。國民の生活程度が向上したことである。精神的に低下して物質的に向上したことである。この植民地による國民全般の墮落が、英國に取つて一の重大なる關心を持つべき事象でなければならぬ。如何に、海軍を強化し、空軍を増強しても國民全般の弱體化は、その實力を發揮せしめないものである。そしてその英國人全般の弱體化は、植民地經營の一の結果として英國が刈り取らなければならぬ收穫である。

いづれにせよ、英國の植民地保持策と、ドイツの植民領域擴張策が、世界のあらゆる方面に於て衝突するのは、争へない事實である。現在、大植民地を有する英國の舊き體制が、どこまでつゞくか。即ち内部的の堅確性がどこまで維持出来るか。これは過去の狀況のみを以

て安定なものとして看過すべく、あまりに國際的情勢が變つて來てゐるのである。

一三 四大經濟圏の動向と英米の力量

さて我々は、世界の動きに對して新しき觀點から、これを批評することも重要である。國家間の戦争にせよ、單に軍隊の力のみでなく、國民の全般的機能の發揮が、その最終の決を與へてきてゐる。これを除外して、戦局を判斷しても何の効果もないのである。

英國はもと／＼老國である。その國際的地位は百五十年に亘り世界の高位に据ゑられ、その強力な海軍と自由貿易とにより、世界に富強を誇つてゐるのである。世界最大の植民地を有して、その中に、經濟機構を、打ちたてゝゐるのである。そして我々は、前章においてこの經濟機構を基礎として英國の實力を論じたのであつた。勿論、その機構たるや歴史的のものであり、これを一朝一夕に破壊して、世界を新經濟機構に置くことは不可能のことである。併しながら、世界の動きは、次第に變つて來てゐるのである。早くも世界經濟の機構が英國を中心とせざる方向に流れ始まつてゐることは明である。その底流として、新しい方向

が認められて來てゐるのである。

英國が、列國より一步先きに立ち上つて、大量生産により、世界の富を獨占した時代は、早くも過ぎ去つてゐる。小國家群をその貿易の市場とした時代も過ぎてゐるのである。その後から競争に参加した列國も、次第に工業生産力を増大し、海運業を伸張し次第に英國の牙城に迫る兆候を示してゐる。

今や歐洲においては、ドイツは、獨伊樞軸の支配力を強化し、歐洲經濟圏を形成しようとしてゐる。英佛の經濟的勢力を、歐洲の王座より引退せしめ、アフリカもこれも参加せしめて、自給自足の最高統制の形態を作ること而努力してゐる。またソ聯は獨自の支配區域により一つの經濟的獨立の境域を成すことを計畫してゐる。日本は東亞において經濟圏を確立しその指導の地位に立ち、理想の繁榮を目的として、國家の總力を擧げて戦つてゐる。またアメリカ合衆國は、兩米大陸の經濟的支配權を持ち、そこに一の經濟圏を設立する活動をつゞけてゐる。

この世界の四大經濟圏は、それぞれその確立に闘争をつゞけてゐる時である。この趨勢は

既に明であり、明日の世界は、この動きを除外して考慮することを許されるものではない。勿論かゝる經濟的分野の設定は急速に成功するものではなく、漸次の活動が次第に強化せられて來るのである。英國の經濟界がこの餘波を受けることは明白であり、何時まで舊勢力によりてその王座に踏み留まり得るか、英國に取つて一の國運の分岐點となるであらう。

この歐洲經濟圏並に世界の他の經濟圏に、英國がどれだけ肉薄するかが一の問題である。そしてそこには、英國が後退するまでは絶えざる抗争がつゞけられるであらう。我々は、これは將來の永續的問題として考察しなくてはならない。

次に我々は、英國の今後の力量を判断するに際し、英國だけを孤立して考へることは出来ない。歐洲に於ては、嘗つては英佛對獨伊の問題であつたが、今や三國同盟成り、英佛對日獨伊の樞軸の關係にまで發展してゐる。そして日本としては、その皇道を世界に宣布するに際し、英國のみならず、米國の動向が重要な問題として、展開されて來る。

英國と米國とが如何に密接なる關係があるかにつき、ここに述べる機會を持たないが、今後の戦局に米國が何處まで積局的に出るか、我々として深く考慮する必要がある。そして

第一次世界大戦に於ける米國の動向は、その判断に價値を與へるものである。

第一次世界大戦當時、米國には約千八百萬のドイツ系米人が在住してゐた。その國民性、その活動とその堅實なる經營とにより、ドイツ系米人の米國における勢力は、外部から想像出來ぬ位のものであつた。そしてその事が、ドイツの米國を期待した一大理由であつたのである。第一次大戦においては、ドイツ、英國共に米國の蹶起を促し、その米國を共同陣營に導入した方が、最後の勝利を得ることが確定的事實であり、ドイツ、英國の外交戦が、米國に火花を散らしたのであつた。この千八百萬の同胞に期待してゐたウイルヘルム二世の希望は、遂に裏切られたのであつた。それは果して何であつたらうか。

云ふまでもなく英國外交の勝利であつたのである。ドイツの外交に比し、英國のそれは甚だ地味に見える。第一次大戦においては、英國は米國に對して表面殆ど企圖する所ないらしく、公會の席において、英國への援助を要請することすら殆どなかつたのであつた。それにも係らず、米國の内部の空氣を全く英國援助に導いてしまつたのである。經濟力を有し、米國の動きを見るに敏な英人は、見事に米國の輿論を導いてしまつたのである。米國の獨塊側

に立つことは、全く確實と觀測せられてゐたにも拘はらず、英國の老練なる外交手段が、米國を聯合軍に參戦せしめたのである。あの時の英國外交の秘術は、外交界の奇蹟と稱せられてゐるのである。

この事實は、今次大戦にも深く考へるべき所である。

一四 英國侮りがたし

ドイツの進出は、次第に米國と利益が相容れなくなつてゐる。米國市場においてさうであり、歐米においてさうであり、また南米においてさうである。南米は合衆國として重要な共榮圏であり、南北兩大陸は、一の極めて有力なるブロックを形成してゐる。そこにドイツは次第に着眼してゐるのである。ドイツが南米殊にブラジル方面に市場を開拓し、又移民を送つてゐるのは有名な事實である。これも次第に有力なるものとなるべく、米獨は南米において、抗爭を開拓してゐるのである。英國外交の方向とその力量と、民族的歴史關係とにより、米國が英國側に努力を寄せてゐるのは既に明な所である。驅逐艦の讓渡と云ひ、大

西洋中の英の屬領八ヶ所の米國への供與と云ひ、英米間の協調は、驚くべきものがある。その大西洋中の島嶼等は、米國軍事基地として、米に使用を許すわけである。英米間に於ては日獨伊樞軸に對し、種々の協定あるものゝ如く、經濟的援助のみならず、軍事的意義が濃厚となりつゝある。殊に米國の太平洋政策は、漸次露骨となつて來るであらう。太平洋に米國が大なる關心を持つて來たのは、争へない事實であり、シンガポールも次第に英國海軍の根據地のみならず、米國の基地となる空氣がある。南方には、英國の資源豊なる領域もあり、又米國の太平洋政策上、外交的手段も、いよゝゝ烈しく打たれることであらう。

かく英米の接近が實際的問題となつた以上、英國の力量は決して侮りがたいものである。資源に於て増強せられた事になり、又軍事的に援助を受けることにもなるのである。英國が空軍の大増強を計畫してゐる今日、この事が、その擴張に響かぬ筈はないのである。

英國ではドイツの開戦を極度に恐れてゐた空氣が見えるのも争へない所である。英國の内閣としても、開戦前から、歐洲の經濟的統合を熱望し、ドイツを加へて、圓滿なる國際經濟的發展を考慮してゐた事も認められる。しかし、かゝる一時的の糊塗では、新しい力は防ぎ

得ないのである。

また英國に於ては、その民主主義の思潮は、牢固たるものがあり、ドイツに對し、民主主義的武器を以て戦ふのであると説くのである。英國が戦時體制を強化せんとして國民總動員を起し、從來の國民組織の上に統制の新政策を命ずる時、どれだけその機能が發揮せられるかは、よく觀察すべきである。そして又英國の軍部が、民主主義的思潮を押し切つて、どれだけ、軍の行動を圓滑に實行に移し得るか、これも明日の問題として残るであらう。

昭和十五年十二月十日印刷
昭和十五年十二月廿一日發行

苦悶の英國
定價 一圓五十錢

著者 東 健 吉

發行者 上 田 唯 郎

東京市麴町區飯田町二ノ八

印刷者 高 橋 誠 司

東京市京橋區小田原町三ノ二〇



發行所

東京市麴町區飯田町二ノ八
電話替(東京)八八九六五
電話(三三)九段三二三三

ふたら書房

目 書 行 刊

笹野雨花著 既刊

論語讀本—東洋古典文庫—

四六判三六頁 洋一・八〇 送二五

論語は東洋隨一の古典であり、わが國教學の根柢を培つた聖典であるが、近代人は東洋の古典に對しては西洋のそれに對するほど敬愛の念をたかぶらせてゐない。それ故に論語全般を味讀してゐる人も少い。かゝる傾向を慨して成つたのが本書である。

笹野雨花著 近刊

孟子讀本—東洋古典文庫—

四六判四〇頁 洋一・八〇 送二五

孟子は論語と共に崇ばれる古典である。論語讀本に示したやうに、漢文の素養すくない現代人にも、以て直ちに孟子の眞髓に入り、孟子の信念に接せしめるやうに現代語によつて忠實に讀解し詳説したのが本書である。論語讀本と共に世人の繙讀をすゝめる。

二荒 伸編著 近刊

讀書と教養

四六判四〇頁 洋二・五〇 送二五

現代の碩學數十名の讀書に關する名隨筆を集大成したのが本書である。讀者はこれら珠玉の如き名文の中に、卷を措くに忍びざる名言、教訓、滋味あふるゝ共鳴ふかき言葉などを發見し、先人が如何に讀書し、如何に苦心し、如何に勞作したかを知り得るであらう。

788
225



房書らたふ

Ⓢ Y 1.50